様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：１５５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００５４５

研究課題名（和文）近世中国語資料に見られる入声の研究

研究課題名（英文）A study of the entering tone in Early Modern Chinese materials

研究代表者
更科　慎一（Sarashina, Shinichi）

山口大学・大学院東アジア研究科・准教授

研究者番号：００３７９９１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：明代に編纂され、十言語（女真語、モンゴル語、ウイグル語、ペルシャ語、サンスクリット語、チベット語、ビルマ語、百夷語、八百語、シャム(タイ)語）の異国文字及びそれに対する音訳漢字を含む所謂乙種本の『華夷訳語』を用いて、明代を中心とする近世中国語における入声の変遷の実際を明らかにした。本研究により、百夷文字、八百文字、チベット文字、ビルマ文字の四種のインド系文字によって書き表された中国語音延べ1762字がローマ字転写され、それぞれの音韻的特徴が記述された。入声については、おおむね、3種の音節末子音の区別が失われ、声門閉鎖音が残っている状態が想定されるとの結果が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は、現在世界最大の話者人口を有する北方中国語(Mandarin)の音韻体系の形成史の解明に寄与する。本研究が扱った資料は中国人が諸外国語を学ぶために作った教科書に見られる発音表記であり、教科書という実用的性質から、当時の中国語音の現実を率直に反映していると見られるが、多種の文字を扱わなければならないという難点があり、中国語の音韻の資料としてこれまで十分に研究されているとは言えない。本研究によって、多言語の発音を表記した漢字、及び多言語の文字によって表記された中国語音が整理され、隋唐代の中国語音との対応関係が明らかにされたことによって、中国語学研究の新資料を加えることができた。

研究成果の概要（英文）：The present study is a contribution to Early Modern Chinese phonology, in which the so-called Hua-yi-yi-yu with texts, a compilation of ten foreign language (Jurchen, Mongolian, Uighur, Persian, Sanskrit, Tibetan, Burmese, Baiyi Tai, Yuan Tai, and Siamese(Thai)) in their own writing systems and also their phonetic translation through Chinese characters, is utilized for analysis. The main purpose of this study is to clarify the evolution of the entering tone in early modern Chinese (mainly during the Ming dynasty). In this study, a total of 1,762 Chinese morphemes written in four different scripts derived from the Brahmi script --- Baiyi, Yuan, Tibetan, and Burmese, were transcribed into romanized characters, and their phonological characteristics were described. The results of the study indicate that the distinction between the three types of syllable-final consonants (i. e.: -p, -t, -k) has been lost, and that the glottal stop may remain.

研究分野：中国語学

キーワード：近世中国語　入声

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）2019 年 8 月、研究代表者は中国の北京大学で開催された国際シンポジウム「第一届北京話学術研討会暨『早期北京話珍本典籍校釈与研究』新書発布会」に出席して近世中国語の入声に関する報告を行った。入声は古代中国語の漢字に付される四種のアクセント「四声」の一つで、現代北京語ではすでに消失したとされるものである。この発表の準備段階において、自身が多年手掛けている多言語の対訳教科書で明代に編纂された『華夷訳語』において諸言語を音写するために用いられた漢字について、音韻体系を帰納する段階にすでに入ったことを痛感し、明代を含めた近世の中国語音韻史の最も重要なポイントでもある入声の変遷について学術的に描き出そうと思い立った。折しも、中国では近年、上記シンポジウムの開催にも現れている通り、北京方言の形成史が盛んに議論され、関連する主として清代の資料が大型の叢書として相次いで発刊されている。研究代表者は清代北京方言を専門とする者ではないが、その前段階の明代の北方中国語の音韻状態を明らかにすることは、清代北京語の研究に対しても裨益するところ大と考え、研究を開始した。

（２）本研究の主要な対象である『華夷訳語』は多くの異本を有し、世界各地の研究機関に所蔵されている。主な本であるベルリン本、復旦大学図書館本、東洋文庫本、パリ・アジア協会本、パリ国民図書館本、北京図書館本、天一閣図書館本などについては、本研究開始以前に、原本、デジタルアーカイブ中の画像、影印本等によってすでに閲覧済みであり、データもあらかた収集した状態にあった。但し、膨大かつ多言語の書であるために見落としも少なくなく、また未見の異本も複数あったので、資料のより完全な収集も課題として残っていた。

２．研究の目的

本研究の目的は、明代を中心とする近世中国語における入声の変遷の実際を、当時の文献資料を用いて明らかにすることである。「実際」という語をここに使ったのには次に述べる理由がある。一口に明代の近世中国語資料と言ってもその種類は多く、作者には中国人もあれば外国人もある。中国人が撰述した音韻関係の文献は韻書(発音字典)と韻図(音節表)を主とするが、これらは当時の中国知識人の尚古観念(古きを良しとする観念)その他の規範意識が作用して、当時の真の話し言葉の音韻がそのままには反映されない場合がしばしばある。外国人が撰述した語学書の場合、概して実用に奉仕する性格が強く、また外国人としての客観的な記述態度が貫かれているために、比較的現実の音韻状態がすなおに記録される傾向があるけれども、外国人特有の誤解や音韻体系のねじ曲げもまた発生しやすい。本研究では、明代の中国人が、中国語ではない言語を学習するために作成した対訳教科書『華夷訳語』の表音資料を用いた。この種の資料には、外国語を音写した漢字(音訳漢字)が大量に含まれているが、これらは当然、資料が作成された明代当時の中国語の発音を背景に音写されたものである。『華夷訳語』の音訳漢字は実用に奉仕するものであるから尚古意識の呪縛からは自由であり、かつ中国人の手によるものであるから漢字音の扱いに対する異国的な誤りも見られないことが期待できる。即ち、明代中国語の実際の発音を反映していることが期待できる。『華夷訳語』のような対音対訳資料を用いて中国語の音韻史を研究することは、古くは 1923 年に汪栄宝が「歌戈魚虞模古読考」を発表するなど、長い研究史を有するが、特殊な文字や言語を扱う事情もあって、中国国内では今日まで研究がそれほど多くないと言える。特に『華夷訳語』の研究は、中国よりはかえって日本で盛んに行われてきたと言えるが、漢語音韻史の立場からこの資料を研究したものは日本でもまださほど多くないと言える。本研究は、『華夷訳語』が、中国語音韻史の領域においても有益な資料となりうることを学界に示す目的も有している。

３．研究の方法

（１）資料について。本研究では、十言語（女真語、モンゴル語、ウイグル語、ペルシャ語、サンスクリット語、チベット語、ビルマ語、百夷語、八百語、シャム(タイ)語）の異国文字及びそれに対する音訳漢字を含む所謂乙種本の『華夷訳語』を用いた。この書は、全ての内容が揃った状態で所蔵されている本がなく、かつ１の（２）にも述べたように世界各地の研究機関に異本が所蔵されているという研究上の困難がある。本研究においては、現有のデータをより完全なものとするために、東京の東洋文庫、大阪の杏雨書屋、京都の京都大学人文科学研究科図書館、及び台湾の二か所の図書館(故宮博物院図書館及び中央研究院傅斯年図書館)に赴いて閲覧済みテキストの点数を増やし、データをより整備した。また、国立公文書館(旧内閣文庫)のデジタルアーカイブを閲覧し、清代の異本のデータを増やした。本研究で扱ったテキストの言語種の範囲について言えば、サンスクリット語テキストは体裁が特殊であること、及びこの言語を研究する体制が研究代表者に整っていないことが理由で、扱うことができなかった；また女真語は、この言語の音韻を明らかにする他の資料が相対的に乏しく、それを手掛かりにして中国語の音韻を研究する段階に一般的研究水準がまだ至っていないことから、やはりほとんど扱わなかった。

（２）資料について(続)。『華夷訳語』の研究の過程で、音訳漢字以外に、異国文字を記した部分もまた中国語の音韻の研究資料とすることができるということを強く認識するようになった。即ち、異国文字が書かれた表文の部(研究者たちの間で「来文」と称されている部分)の中に、中国語を意味に基づいて翻訳せずに単に音訳した箇所が、かなりの程度見つかったのである。このことについては先行文献にも指摘があったけれども、本研究期間において、四種類の異国文字で表音された漢語音を新たな研究対象として本格的に調査し、成果を発表することができた。

４．研究成果

（１）資料の性質と体裁についての成果。乙種本『華夷訳語』(サンスクリット部分を除く)の構造について、従来、対訳語彙の部(“雑字”)と表文の部(“来文”)の二つの部分に分かれ、雑字には本編のほか続編が存在するということが報告されていた。本研究では、諸本に存在する雑字と来文の状況をつぶさに調べ、次のような新たな知見を得た。

①ウイグル語部分『高昌館訳語』の“雑字”部分の内容を分析し、諸本に見られる雑字続編の異なり項数が 326 であり、それらが五つの部分に分かれることを示した(更科(2021:74))。また、“雑字”の本編と続編に収録された語彙が“来文”の中で活用されている度合いを調べ、来文中に出現する語彙が、雑字続編の特定の部分に偏って分布することを示した(更科(2021:75))。以上の知見は、華夷訳語の来文の形成過程や、成立・書写年代を異にする諸本の間の関係を明らかにするために役立つはずである。

②ウイグル語部分『高昌館訳語』の“雑字”と“来文”における中国語とウイグル語の対訳関係を分析し、“来文”作成者のウイグル語に対する語彙的・文法的知識が“雑字”作成者よりも低くなっていることを示した(更科(2021))。また、“来文”中に単に漢文を音写した語が多数存在することを示した上、なぜ意訳でなく音訳が採用されたかについて考察した(更科(2021))が、その音韻体系の分析については、先行文献(荘(2018))がすでにあったため今回は行わなかった。以上の成果もまた、華夷訳語の雑字・来文の形成過程を明らかにするために役立つはずである。

③八百語部分『八百館訳語』の“来文”のベルリン本と東洋文庫本の二種のテキストの文面を比較し、両者の内容が大きく異なることを明らかにした(更科(2022b))。考察の結果、すでに泉井(1953)が報告している東洋文庫本のテキストには、ベルリン本と比べると削除された字句が少なからずあること、またベルリン本が、東洋文庫本にはない「漢文に対する八百文字音写」の部分を有することが明らかとなった。

④百夷語部分『百夷館訳語』の“来文”について、ベルリン本を底本として、先行文献である泉井(1949)が扱っていない八篇の百夷語の文章をローマ字に転写し、語釈と語彙索引をつけた(更科(2022c))。

⑤乙種本の諸本のうち、『四庫存目書』所収の復旦大学図書館本と、杏雨書屋に所蔵されている内藤湖南旧蔵本とがもとは同一の本であった可能性を示した(更科(2024:101))。

（２）資料に反映された近世中国語音の解明に関する成果。申請当初は乙種本『華夷訳語』の“雑字”部分の音訳漢字の背後にある中国語音の帰納を中心に考えていたが、研究期間中に、同書の“来文”部分にある異国文字で表記された漢語音の分析の重要性が認識され、実際には、研究期間のほとんどが来文に対する分析に費やされた。具体的には、百夷文字、八百文字、チベット文字、ビルマ文字の四種の音標文字によって表記された漢語音を分析の対象とした。この四種の文字はいずれもインド系文字であり、子音・母音のいずれに対しても比較的精緻な描写がなされている。更に、声調体系についても、部分的な考察を行うことができた。具体的成果は次の通りである。

①『百夷館訳語』“来文”中の百夷文字表記漢語音の分析(更科(2022a))。このテーマについて、研究代表者は 2004 年に小考を口頭発表したことがある(更科(2004))が、本研究では東洋文庫本とベルリン本に基づき、また資料から抽出しえた百夷文字と漢字の対応関係の全てを声母(音節初頭子音)及び韻母(音節初頭子音よりも後ろの部分)ごとに整理し公開した。分析の結果、本資料の背景にある中国語音は明代の北方中国語音として標準的であることが明らかとなった。但し、やや古めかしい特徴が残存しており、南方系要素が混入している可能性も浮き彫りとなった。音節末子音-n と-ng の一部に混同が見られる点も方言的特徴であるが、南方的特徴であるとは限らない。入声に関して言えば、北方方言には明代においてすでに脱落していたはずの音節末子音(入声韻尾)-p，-t，-k が表記されていると解釈できる例が少数見つかった。

②『八百館訳語』“来文”中の八百文字表記漢語音の分析(更科(2022b))。①と同様に、資料から抽出しえた八百文字と漢字の対応関係の全てを声母(音節初頭子音)及び韻母(音節初頭子音よりも後ろの部分)ごとに整理し公開した。分析の結果、本資料の背景にある中国語音もまた明

代の北方中国語音として標準的であることが明らかとなった。声調体系についても知見がもたらされた。八百文字は、同系統の文字であるタイ文字やラオス文字の特徴として一般に知られる「高子音字」と「低子音字」の別をもち、この字母の高低の区別が中国語音の声調の区別と一定程度対応することも明らかとなった。即ち、高子音字表記が「陰平声」及び「去声」のカテゴリと対応し、低子音字表記が「陽平声」及び「上声」のカテゴリと対応することがわかった。この結果は明代の他の音韻資料や、現代の北京方言にも通ずるところがあり、注目に値する。

③『西番館訳語』“来文”中のチベット文字表記漢語音の分析(更科(2023))。①②と同様に、資料から抽出しえたチベット文字と漢字の対応関係の全てを公開し、チベット文字の子音字と母音字と中国語音との対応関係を、分析を通じて明らかにした。チベット文字もまた、子音字の用法から音節の声調の高低を抽出することが可能で、分析の結果、「去声」はピッチが高く、「陽平声」と「上声」はピッチが高いという、②と類似した結果を得た。「陰平声」については、②とは異なり、ピッチが高いという積極的な証拠が見いだされなかった。

④『緬甸館訳語』“来文”中のビルマ文字表記漢語音の分析(更科(2024))。この資料のビルマ文字漢語音表記については、西田龍雄氏の先行研究がすでにあるため(西田(1972))、本研究は西田氏未使用資料によってデータの量を増やすとともに、西田氏の所説の検証及びビルマ文字による漢語音表記システムの詳細の解明に意を注いだ。中国語音の分析に関して言えば、表記システムの複雑性が災いし、あまり精緻な議論ができなかったが、入声が独立した調類を有し、音節末に声門閉鎖音を持っていた可能性が示唆された。

＜引用文献＞

泉井　久之助、「百夷館雑字並に来文の解読」、『比較言語学研究』、創元社、1949、191-304
泉井　久之助、「八百館雑字ならびに来文の解読」、『京都大学文学部研究紀要』2、1953、1-109
更科　慎一、「『百夷館訳語』に見られる百夷文字表記漢語について」、山口中国学会大会口頭発表、2004
更科　慎一(2021)　→　下記５、雑誌論文の⑤
更科　慎一(2022a)　→　下記５、図書の①
更科　慎一(2022b)　→　下記５、雑誌論文の④
更科　慎一(2022c)　→　下記５、雑誌論文の③
更科　慎一(2023)　→　下記５、雑誌論文の②
更科　慎一(2024)　→　下記５、雑誌論文の①
荘　子儀、「『高昌館課』中的漢回対音」、『声韻論叢』21、台湾学生書局、2018、103-140
西田　龍雄、『緬甸館訳語の研究』、松香堂、1972

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 更科慎一	４．巻 74
２．論文標題 『緬甸館来文』に見られるビルマ文字表記漢語について	５．発行年 2024年
３．雑誌名 山口大学文学会志	６．最初と最後の頁 99，135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 更科慎一	４．巻 73
２．論文標題 『西番館来文』に見られるチベット文字表記漢語について	５．発行年 2023年
３．雑誌名 山口大学文学会志	６．最初と最後の頁 39，77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 更科慎一	４．巻 72
２．論文標題 『八百館来文』に見られる八百文字表記漢語について	５．発行年 2022年
３．雑誌名 山口大学文学会志	６．最初と最後の頁 75-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 更科慎一	４．巻 16
２．論文標題 ベルリン本『百夷館来文』に見える百夷語の資料について	５．発行年 2022年
３．雑誌名 異文化研究	６．最初と最後の頁 17-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 更科慎一	４．巻 15
２．論文標題 ウイグル語学習書としての『高昌館来文』の性質について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 異文化研究	６．最初と最後の頁 66-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 更科慎一
２．発表標題 乙種本『華夷訳語』対音資料から見た漢語軟口蓋音声母の口蓋化について
３．学会等名 神戸市外国語大学Research Project B 「アジア諸言語の接触と変容：通時的・共時的観点からのアプローチ」
４．発表年 2024年

１．発表者名 更科慎一
２．発表標題 乙種本《華夷訳語》“ 来文 ” 里的民文-漢字対音
３．学会等名 中国語言歴地理研究論壇
４．発表年 2024年

１．発表者名 更科慎一
２．発表標題 乙種本『百夷館訳語』来文の百夷文字表記漢語について
３．学会等名 「五言語合璧「普度明太祖長巻」」国際シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 更科慎一
２．発表標題 明の四夷館での外国語教学の実態について
３．学会等名 山口中国学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 更科慎一
２．発表標題 百夷館訳語の漢字音写システムについて
３．学会等名 「五言語合璧「普度明太祖長巻」」の会読会（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 更科慎一(分担執筆：森野正弘・富平美波編集責任)	４．発行年 2022年
２．出版社 白帝社	５．総ページ数 258
３．書名 東アジア文化の歴史と現在(本人執筆部分：第6章)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関